

「ぐんまの万葉集」

群馬県立女子大学教授 北川 和 秀

◎万葉集卷十四（東歌）の配列

国名判明	雑歌 5	上総 1首 下総 1首 常陸 2首 信濃 1首	} 東海道 - 東山道
	相聞歌 76	遠江 2首 駿河 5首 伊豆 1首 相模 12首 武蔵 9首 上総 2首 下総 4首 常陸 10首 信濃 4首 上野 22首 下野 2首 陸奥 3首	
	譬喩歌 90	遠江 1首 駿河 1首 相模 3首 上野 3首 陸奥 1首	} 東海道 } 東山道
国名不明 140	雑歌 相聞歌 防人歌 譬喩歌 挽歌	17首 112首 5首 5首 1首	

合計 230首

◎万葉集卷二十・防人歌

①天平勝宝七歳乙未二月、相替りて筑紫に遣はさるる諸国の防人等の歌

遠江国	7首 / 18首
相模国	3首 / 8首
駿河国	10首 / 20首
上総国	13首 / 19首
常陸国	10首 / 17首
下野国	11首 / 18首
下総国	11首 / 22首
信濃国	3首 / 12首
<u>上野国</u>	<u>4首 / 12首</u>
武蔵国	12首 / 20首
84首 / 166首	

②昔年防人 … 8首  
合計 92首

◎参考

太政官奏すらく、「武蔵国は山道に属ると雖も、兼ねて海道を承けたり。公使繁多くして祇供堪へ難し。その東山の駅路は上野国新田駅より下野国足利駅に達る。此れ便道なり。而るに枉りて上野国邑楽郡より五箇駅を経て武蔵国に到り、事畢りて去る日に、また同じき道を取りて下野国に向ふ。今東海道は、相模国夷参駅より下総国に達るまで、その間四駅にして往還便ち近し。而して此を去り彼に就くこと、損害極めて多し。臣ら商量するに、東山道を改めて東海道に属らば、公私所を得て、人馬息ふこと有らむ」とまうす。奏するに可としたまふ。 〈続日本紀宝亀二・一〇・二七〉



3405 <sup>かみつけの</sup> <sup>を</sup> <sup>ど</sup> <sup>た</sup> <sup>ど</sup> <sup>り</sup> 上毛野平度の多杼里が川路にも子らは逢はなも一人のみして

上野国の平度の多杼里の川へ行く道で、あの娘が逢ってくれたらなあ。一人だけで。

3405或本 <sup>かみつけの</sup> <sup>を</sup> <sup>の</sup> <sup>た</sup> <sup>ど</sup> <sup>り</sup> <sup>あ</sup> <sup>は</sup> <sup>ち</sup> 上毛野小野の多杼里が安波治にも夫なは逢はなも見人なしに

上野国の小野の多杼里の安波治でも、あなたが逢ってくれたらなあ。誰にも見られないで。

3406 <sup>かみつけの</sup> <sup>く</sup> <sup>く</sup> 上毛野佐野の茎立ち折りはやし吾は待たむゑ今年来ずとも

上野国の佐野の青菜を折ってお料理を作り、私はお待ちしますわ。たとえあなたが今年はいらっしゃらなくとも。

3411 <sup>た</sup> <sup>ご</sup> <sup>ね</sup> <sup>よ</sup> <sup>せ</sup> <sup>つ</sup> <sup>な</sup> <sup>は</sup> 多胡の嶺に寄綱延へて寄すれどもあにくやしづしその顔よきに

多胡の峰に引き綱を掛けて引き寄せるように、頑張っって言い寄ってみたけれど、ああ、憎らしいよ、水底に沈んでびくともしない石のようなやつめ。（ちっとも靡かないでさ。）いくら顔が美しいからって。

3413 利根川の川瀬も知らず<sup>ただ</sup>直渡り波にあふのす会へる君かも

利根川の浅瀬がどこなのかも考えずに、やみくもに渡って波を受けてしまったように、ばったりと出会ったあなたですこと。

3414 伊香保ろの八尺の井手に立つ虹の<sup>の</sup> <sup>じ</sup> <sup>あ</sup> <sup>ら</sup> <sup>は</sup> 頭ろまでもさ寝をさ寝てば

伊香保の高い井堰の上に現れる虹がはっきりと見えるように、そのようにはっきりと二人の仲が明らかになってしまうほど一緒に寝ていられたらなあ。

3417 上毛野伊奈良の沼の<sup>お</sup> <sup>ほ</sup> <sup>あ</sup> <sup>ぐ</sup> <sup>さ</sup> <sup>よ</sup> <sup>そ</sup> 大藺草外に見しよは今こそ益れ

上野国の伊奈良の沼に生えている（まだ刈り取る前の）大藺草と同じように、あなたのことを傍らから見ていただけの頃よりも、恋人同士になった今の方が恋心は増して

いますものを。

3418 上毛野<sup>さの</sup>佐野<sup>だ</sup>の苗のむら苗に事は定めつ今はいかにせも

上野国の佐野のたんぼの苗を使った占いで結婚を決めました。今さらどうにかできませんか。（できないでしょう。）

3420 上毛野<sup>ふなはし</sup>佐野<sup>はな</sup>の舟橋取り<sup>はな</sup>放し親は<sup>さ</sup>離くれど吾は<sup>わ</sup>離るがへ<sup>さか</sup>

上野国の佐野の舟橋をばらばらにしてしまうように、親は二人を引き離しますけれど、私はあなたと離れたりしませんよ。

3421 伊香保<sup>ね</sup>嶺<sup>かみ</sup>に雷な鳴りそね<sup>わ</sup>吾が<sup>へ</sup>上には<sup>ゆゑ</sup>故はなけども子らによりてそ

伊香保の峰に雷よ鳴ってくれますな。私にとっては別にどうということはないのですが、あの娘が怖がるものでね。

3422 伊香保風吹く日吹かぬ日ありと言へど<sup>あ</sup>吾が恋のみし時なかりけり

伊香保風は、吹く日も吹かない日もあると言いますけれども、私があなたを思う恋心ばかりは、止むときがありません。

\*参考「<sup>からどまりのこ</sup>韓亭能許の浦波立たぬ日はあれども家に恋ひぬ日はなし」（3670番）

3423 上毛野<sup>かみつけの</sup>伊香保<sup>ね</sup>の嶺<sup>ふ</sup>ろに降る<sup>よき</sup>雪の行き過ぎかてぬ妹が家のあたり

上野国の伊香保の峰に降る「雪」ではありませんが、たやすく「行き」過ぎることができない、あなたの家のあたりよ。

### ◎上野国の可能性のある歌

3494 <sup>こもちやまわかかへるで</sup>子持山若鶏冠木の<sup>もみ</sup>黄葉つまで寝もと吾は<sup>わ</sup>思ふ<sup>な</sup>汝は<sup>あ</sup>何<sup>も</sup>どか思ふ

子持山の若いカエデの葉が秋になって色づくまで、あなたと共寝をしたいと私は

思います。あなたは どう 思います？

3540 さわたり てご 左和多里の手児にい行き逢ひ赤駒があが足搔きを速みこと言間はずき来ぬ

左和多里の乙女に出逢ったけれど、私が乗る赤毛の馬の歩みが速いので、言葉を交わさないうまま来てしまいました。

◎上野国の防人歌

4404 なにはち 難波道を行きて来までとく吾わ妹子ぎもこが着けし紐がを緒絶えにけるかも  
右の一首は、すけのよぼろ助 丁上毛野牛甘うしかひのなり。

難波への道を行って帰って来るまで御無事だと、妻が着けてくれた紐が、長い旅で擦り切れてしまったことだなあ。

4405 わがいもこ妹子がしぬひにせよと着けし紐糸になるともわ吾は解かじとよ  
右の一首は、ますひと朝倉益人のなり。

私の妻が、「私を思い出すよすがにしてください」と着けた紐は、たとえ擦り切れて糸のようになってしまっても私は解くまいと思っているよ。

4406 わがいは家ろに行かも人もが草枕旅は苦しと告げや遣らまくも  
右の一首は、ふし大伴部節麻呂のなり。

私の家に行く人がいてくれたらなあ。そうすれば、旅はつらいと告げに行ってもらうのになあ。

4407 ひなくも曇りうすひ碓日の坂を越えしだに妹が恋しく忘らえぬかも  
右の一首は、をさだべの こいはさき他田部子磐前のなり。

碓氷峠を越える時に、妻のことが恋しく思われて、忘れることができません。

二月二十三日に、上野国の防人 さきもりのことりづかひのだいさくわん部領使 大 目正六位下上毛野君駿河が たてまつ進 れる歌の数は十二首なり。但し拙劣なる歌のみは取り載せず。